

もう1つの課題があるのです。今もルワンダやアフガニスタンの例を出したんですが、もしも本当に大量虐殺がおきたり安全ではない状況が起こった時には、国際的に積極的に介入すべきではないだろうか。人間の安全保障なんてまだるっこしい。もしも状況が悪くなった場合には、もっと積極的介入をすべきという議論もある。それは特にルワンダの大量虐殺など、その他にも色んな虐殺があったときに、何もしないで座して手を汚さないように国際社会がしていたから、もっと積極的に介入しなければならないという議論が出ています。これは主にカナダを中心として、

「人々を守る義務」"Responsibility to Protect" という題の報告書が出ていますが、そういう形で対応する義務がある。道徳的にいうと確かにそうだと思います。ルワンダでもたくさんの難民が難民キャンプから追い出されて、密林の中で苦労していたとき、もっと介入して欲しかったと思うのです。介入がなかったから、結局、人道機関である者が歩いて、四輪駆動の車に乗って、色んな人々を探して救い出すということをしていた。そのとき、平和維持軍も国連軍も来てくれなかったんです。それはそういうものを出すことによって、より激しい紛争になるといけないという慎重な主要国の判断だったと思うのですが、主要国は本当は出てこなければならぬのではないだろうか、それは義務であるという議論もあるのです。ところが、これを通そうとすると国際的に容易には合意は出てきません。今、国連でも人間の安全保障か介入の必要性かという二つの議論をめぐって、いろいろな国々の間で議論が続いています。介入の義務が道徳的には確かにあるのですが、介入をすることによって戦争になってしまうことがあるわけです。それが良いのかどうだろうかと。

介入の最終的な必要性はあるが、あらゆることをしてそういう状況にならないための予防的・外交的な努力に頼るほうが現実的ではないかと私自身は思っています。特に国連においては192のメンバー国があるが、その大半は開発途上国であり植民地支配を受けた国々だから、介入の権利をやたらと認めると、大国によって色んな形で弾圧されたり妨害されたり侵略されたりするのではないかという疑いが強まります。人間に対する必要性は認めるが、人間の安全が国内で脅威にさらされたときに、外からの影響力はどのような形でどの程度進めるべきかということについては、まだ意見の一致はない。或いは、色んな形で工夫は行われていますが、これが答えだということには至っていないのです。

頭に入れておいていただきたいのは、軍事力の行使ということを、あまりに国家と国家の間で繰り広げられた形で考えすぎているのではないだろうか。本当は、第二次世界大戦以降と言えるかもしれないが、国家と国家が戦場において軍事力を行使して戦うという戦争はほとんどないのです。むしろ国家の崩壊、そこからくる対立、国内における人々に対する脅威、文民に対する脅威、そういう中で、どういう形で軍事的介入が効果が上がるのか。おそらく日本でも色んな議論が出ていると思うんですが、いざ外からの侵入があったときに国としての防衛が必要なのでしょう。しかし本当に必要なのは、防衛の対象がしみこんでくるような、浸透するような状況であっても、そういう状況の中で効果的な軍事力の行使とはどういうものなのか。これはおもしろい議論も研究も最近出てきているが、昔から考えている国境を越えた戦争に対応するための、国家と国家の間の戦争、これも一つの可能性ではあるのですが、色んな形の介入になってくる。その介入の過程でおそらく一番必要になるのは、そこで影響を受けた人々、つまり文民を守りながらそういう文民に脅威を与える人たちを抑えていくという非常に複雑な軍事力・警察力の行使、そういう形での介入がこれからは多くなっていくし現在もそういう傾向が見られます。それを政

治的な理由をたてながら行使していくということは相当難しいことだと思います。大きな軍事力が政治的な問題の解決をもたらしている場合というのは、最近では証明できないのではないのでしょうか。

そういう中で、目的に沿った形で軍事力を使いながらの人間の安全保障の探求が、これからは一番必要とされるのではないかと考えています。今一番どこが危険な状況か、みなさんに伺ったらなんとお答えになるかわかりませんが、広く言われているのはアフリカのスーダン、ダルフールの状況。400万人ほどの人々がいながらきちとした介入が国際的になされていないのです。それは一つには、スーダン政府が国連の介入を認めない。主権の陰に隠れた拒否があるから。そしてそれに対応して、アフリカ連邦の軍が出てはいるが、能力が足りないから十分な対応ができない。それではアフリカ連邦軍に対して国連が支援するという形ではどうかという交渉が続いているが、なかなかスーダン政府が合意しない。こういう中で、実は大量虐殺に近い状況を、座して皆見ているわけなのです。最終的な答えを出すのは難しいが、これが現状にあるわけです。

他にも色んなところがありますけども、私が働いていたころよりはアフリカ全土においても状況はましになっていると思います。ダルフール以外はそういう印象を持つわけですが、まだまだ血みどろな近親間或いは近くに住んでいる人々の間の紛争はやはり続いているのです。イラクにおいてもシーア派とスンナ派、その他の人々の間の市民間の紛争が実態として広がっていて、それをどのように解決していいかわからないということが、アメリカの大きな悩みなのだと思います。

そういう中で皆さんに何をしていただきたいかという、そういう世界にいることを分かっていたきたい。それは相当目を広げてみていないと、あまりに豊かで、そしてやはりあまりに静かだと思いますね。日本では実感として伝わってこない。日本のテレビや新聞で伝わってくるかという、相当選ばないと伝わってこないんです。それに私は物足りない思いを持つわけです。皆さんの元には色んな情報が入る。大学では欲しければ先生方に頼めば出てくるだろうし、欲をもって自分たちがどういう中で暮らしているのか、私たちの役割は何なのか。日本はなんと言っても世界第二位の経済大国なのです。それでこんなに内向きでいいのかと問いかけていただきたいと思うのです。私には日本は非常に内向きに見えています。私がたまたま外で一番ひどい状況の人々のそばにいたから余計に考えるかもしれないが、かつては国際貢献を旗頭にして政治的な議論をしたり実行にも移していたわけです。たとえば開発援助をみると、どんどん減っているのです。10年前と比べて日本の開発援助の資金は激減しています。それは財政再建という大事な事業があるのですが、それでもODAは予算からみて小さな部分です。その削減が公共投資よりも防衛局の防衛費よりも大きく削られている。それをいいのだろうかともっと皆さんには聞いていただきたいですね。政府開発援助は、少なくとも、アフリカに対しては倍増という建前を出しているのだから実行していただきたいわけです。

そして来年、日本は先進国G8のメンバーだし議長国になります。アフリカ開発会議も開かれますが、それも日本の東京で開かれます。その意味では、アフリカに対して日本の指導力、コミットメントを示す絶好のチャンスが来年くるのです。それをどのくらいの方が知っているのでしょうか。国際会議に参加していたら、来年は日本にとってはリーダーシップを示す絶好の機会だと言われて、実はシーンとしてしまったわけです。それをどうやって伝えていったら良いのだろうか。日本に対する期待はあるわけです。アフリカ諸国にいても、日本が如何に勤勉で真面目で、特に敗戦後の厳しいときに復興してきたか、科学技術の先端を開発して広めてきたか、生活程度が平均

して広まっている国なのか、日本のようになりたいといっている国はたくさんあるんです。いつまでも言ってもらえるかは分かりませんが。しかし、そういう期待の中にいて何故答えなければならないかというと、偽善ではなく日本の安全のためでもあるわけです。何故ならこんな島国でたくさんの人々がいて、生産の拠点を近隣諸国に広がっている。そういう国の私たちが今のような生活程度と安全をまっとうしていくためには、他の国々・人々との信頼関係に基づいた交流がなければいけません。国際関係の中で大事にそれを育て一緒に生きていくということは、皆さんの安全保障だと考えていただきたいんです。

そうすることで、なんとかODAの減少している中で反転させたいと思うし、来年はリーダーシップの年でもあるし、皆さんはこれからリーダーシップの中で生きていく方々なので、大いに大学生活を楽しまれ、そして見聞を広げてほしい。何の学問領域が良いかは言いません、それは私にも分かりません。ただ、勉強だけはよくして下さいということだけは言えると思います。

そうすることで、今日の講義に代えさせていただきます。どうもありがとうございました。